

◇金沢文庫（現在は神奈川県立金沢文庫）

<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/bunko/bunkogaiyou.html>

「金沢文庫」ってどんなところ？

金沢文庫は鎌倉時代のなかごころ、北条氏の一族（金沢北条氏）の北条実時が武蔵国久良岐郡六浦荘金沢（現、横浜市金沢区）の邸宅内に造った武家の文庫です。

その創設の時期についてはあきらかではありませんが、実時晩年の建治元年（1275）ごろと考えられています。蔵書の内容は政治・文学・歴史など多岐にわたるもので、収集の方針はその後も顕時・貞顕・貞将の三代にわたって受け継がれ、蔵書の充実がはかられました。

金沢北条氏は元弘3年（1333）、鎌倉幕府滅亡と運命をともにしましたが、以後、文庫は隣接する菩提寺の称名寺によって管理され近代に至りました。現在の金沢文庫は昭和5年（1930）に神奈川県施設の施設として復興したもので、平成2年（1990）から装いも新たに中世の歴史博物館として活動を行っています。

県立金沢文庫は、鎌倉時代の諸相を今日に伝える貴重な文化財を後世に伝えるとともに、その調査・研究の成果を展示や講座を通じて公開し、また、皆様の生涯学習の一拠点としてその役割を果たすべく活動を行っています。

<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/1197/ktv/detail.html?id=7rzgMNdoPDo&playlist=>



蒙古襲来の危局！日本文化を守るために 神奈川県立金沢文庫（2）

「かながわ☆スポットライト」

2016/07/08

県立金沢文庫が保管している「称名寺聖教」と「金沢文庫文書」が国宝に！！

そもそも「金沢文庫」って・・・？今回はその成り立ちを語ります。

◇足利学校（現在は史跡足利学校）

<http://www.city.ashikaga.tochigi.jp/site/ashikagagakko/>

足利学校は、日本で最も古い学校として知られ、その遺跡は大正10年に国の史跡に指定されています。

足利学校の創建については、奈良時代の国学の遺制説、平安時代の小野篁説、鎌倉時代の足利義兼説などがありますが、歴史が明らかになるのは、室町時代の永享11年（1439）関東管領・上杉憲実（うえずぎのりざね）が、現在国宝に指定されている書籍を寄進し、鎌倉円覚寺から僧・快元（かいげん）を招いて初代の席主（しょうしゅ＝校長）とし、足利学校の経営にあたらせるなどして学校を再興してからです。

足利学校は、応仁の乱以後、引き続き戦乱の中、学問の灯を絶やすことなくとし続け、学徒三千といわれるほどに隆盛し、天文18年（1549）にはイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルにより「日本国中最も大にして、最も有名な坂東の大学」と世界に紹介されました。

江戸時代の末期には「坂東の大学」の役割を終え、明治5年に幕をおろしましたが、廃校直後から有志による保存運動が展開されるなど、郷土のシンボル、心のよりどころとして足利学校の精神は市民の中に連綿として生き続け、平成2年の復原完成へとつながり、教育の原点、生涯学習の拠点として、新しい学びの心の灯をともしています。

<https://youtu.be/MxhjJiCMIDo>



足利学校の歴史

足利市

2011/12/06 に公開

◇射和文庫（現在は三重県および松阪市の文化財）

<https://www.city.matsusaka.mie.jp/site/culture-info/izawabunko.html>

射和文庫並びに竹川竹斎関係資料、射和文庫関係資料

射和文庫は、竹川竹斎が嘉永7年（1854）に私財を投じて創設した私立図書館である。往時、蔵書数は親戚・知人からの献本もあって1万冊余りに及んだというが、明治以降散逸し、現在ではおよそ3,000点を蔵する。

蔵書中特筆すべきものとして、室町時代の写本『日本書紀神代卷残本』、国学者本居宣長・荒木田久老等の自筆稿本類、勝海舟と竹斎の交友を物語る資料、竹斎の著書・日記類があげられる。

<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/kennai/kennaiDetail?id=835834>

三重県内の博物館・資料館/射和文庫

幕末から明治初頭にかけて、経世家竹川竹斎が、人材育成のために、多額の私費をつぎ込んで国内の文献を集めて開設した私立図書館。関係資料は県指定文化財となっている。



[http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/Miebunka/media/00851501/00851966\\_M.jpg](http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/Miebunka/media/00851501/00851966_M.jpg)

[http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/Miebunka/media/00851501/00851967\\_M.jpg](http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/Miebunka/media/00851501/00851967_M.jpg)

◇豊宮崎文庫（現在は神宮文庫）

<http://www.isejingu.or.jp/about/cultural/bunko.html>

神宮文庫の歴史

古来、内宮・外宮の域内には文殿や神庫という記録文書を納める施設があり、古儀を重んじる神主の研究調査に利用されていました。

江戸時代に入り、慶安元年（1648）には、外宮神主出口延佳等の努力により、外宮の東隣に豊宮崎文庫が創設されました。

また、貞享3年（1686）には、宇治会合年寄等の発議により内宮文庫が立てられましたが、元禄3年（1690）に内宮近くの林崎の地に移され、林崎文庫と改称されました。両文庫は、図書館であると共に神職子弟の教育機関でもありました。

やがて、明治4年（1871）の神宮改正にともない、豊宮崎、林崎の両文庫をはじめ文殿、神庫等の蔵書を合わせて明治40年（1907）に設立されたのが神宮文庫です。現在の建物は、大正14年（1925）8月に建てられた和洋折衷の建造物で、閲覧室や事務室などを配しています。



[http://www.isejingu.or.jp/about/cultural/img/bunko\\_p01.jpg](http://www.isejingu.or.jp/about/cultural/img/bunko_p01.jpg)

[http://www.isejingu.or.jp/about/cultural/img/bunko\\_p02.jpg](http://www.isejingu.or.jp/about/cultural/img/bunko_p02.jpg)

◇紅葉山文庫（現在は国立公文書館所蔵）

<http://www.archives.go.jp/owning/old.html>

主な古書・古文書

紅葉山文庫は徳川家康が慶長7年（1602）、江戸城内の富士見の亭に文庫を設けたのに始まり、寛永16年（1639）城内紅葉山に移したのでこの名があります。家康の旧蔵本である「駿河御譲本（するがおゆづりぼん）」や「駿河御文庫本」の他、八代將軍吉宗が探訪させた各地の古文書や、長崎奉行に命じて購入させた新刊唐本、大名家等からの献上本も納められています。漢籍では、特に、明代から清初にかけての地方志・医書・随筆・詩文集・戯曲小説などが豊富で、和書では、家康が納めた金沢文庫（かねざわぶんこ）旧蔵本のほか、寛永諸家系図伝・本朝通鑑（ほんちょうつがん）・徳川実紀など、幕府官撰書の浄書本や名家の自筆本が多くあります。また、書物奉行を置いて図書を管理させ、限られた範囲のみに利用を許可したので、その図書はきわめて保存のよい状態で、当時の本箱も含めて伝わっています。

▼紅葉山（もみじやま）文庫本『徒然草』



[http://www.archives.go.jp/owning/images/old\\_img01.jpg](http://www.archives.go.jp/owning/images/old_img01.jpg)

◇蓬左文庫（現在は名古屋市蓬左文庫）

<http://housa.city.nagoya.jp/>

蓬左文庫について

尾張徳川家の旧蔵書を中心に和漢の優れた古典籍を所蔵する公開文庫です。現在の蔵書数は、約11万点。蔵書内容の豊富さが蓬左文庫の特徴となっています。さらに、書籍だけではなく、尾張徳川家に伝えられた2千枚をこえる絵図も所蔵しており、名古屋の城下図から世界図におよぶ古地図や、屋敷図・庭園図など、多彩な内容の絵図が含まれています。

蔵書の閲覧のほかに、徳川美術館の大名道具と合わせて、武家の学問と教養など、近世武家文化をわかりやすく紹介する展示や、徳川美術館・徳川園と連携した講演会などを企画開催します。

蓬左文庫の歴史

蓬左文庫にとって、尾張藩の書物倉である「御文庫」の創設が、その歴史の始まりといえます。

元和2年（1616）、徳川家康の死去により、その遺品の多くが、尾張、紀伊、水戸の御三家に分譲されました。このうち、のちに駿河御譲本と呼ばれる家康の蔵書については、3千冊が尾張家に譲られ、これを契機に、尾張藩の御文庫は形成されました。

この後、御文庫の蔵書は、歴代藩主の書物収集を中心に、その蔵書を拡大し、幕末期の蔵書数は、5万点と推定されます。江戸時代を通じ、尾張藩の御文庫は、質量ともに我が国屈指の大名文庫でした。明治維新後の混乱期には、払い出しなどにより蔵書の約三分の一が流出しています。残った御文庫の蔵書に、「御記録所」をはじめとする尾張藩の役所、別邸の蔵書の一部が加わり、尾張徳川家の蔵書として東京と名古屋の屋敷に保管されることになりました。

尾張徳川家が、財団法人の設立を構想し始めるのは、明治末から大正初期あたりですが、「蓬左文庫」の命名もこの頃のことです。19代当主徳川義親氏は、江戸時代以来の同家の蔵書にたいし、蓬左城（名古屋城）内にあった書物を伝える文庫という意味を込めて「蓬左文庫」と名付けました。

昭和10年、名古屋大曾根邸内に徳川美術館が開館したのと同時に、蓬左文庫は、東京目白の邸内に開館しました。明治維新から蓬左文庫の開館までにも旧尾張藩士の旧蔵書をはじめ、多くの資料が蔵書に加えられています。

公開文庫の道を歩み始めた蓬左文庫ですが、戦争により、10年足らずで、休館を余儀なくされます。本格的にその歩みを再開したのは、昭和25年の名古屋市移管後のことです。翌年から、旧尾張徳川家大曾根邸内の現在地において、一般公開が、始まりました。以後、名古屋市教育委員会の管轄下、図書館の分館をへて、名古屋市博物館開館にともない、昭和53年より、その分館となっています。

現在の蔵書数は約11万点。名古屋市移管後の収集書もすでに3万点を越え、蔵書内容の豊かさが蓬左文庫の特徴のひとつとなっています。

#### 蓬左

「蓬左」とは、江戸時代に使用された名古屋の別称です。古代以来の歴史を有し、全国にその名を知られた熱田の宮は、中国の伝説にいう仙人の住む蓬莱山にあたるという言い伝えがあり、「蓬莱の宮」、「蓬が島」などとも呼ばれていました。このため、蓬莱の宮の左方に開けた新興の城下町である名古屋は、「蓬左」、名古屋城は「蓬左城」とも呼ばれました。つまり、蓬左文庫とは「名古屋文庫」という意味になります。

#### 家康の蔵書「駿河御譲本」

晩年の徳川家康は、学術文化の受容、振興に熱心でした。駿府（現在の静岡）に隠居した家康は、江戸城内に設立されていた富士見亭文庫から、蔵書の一部を移し、駿河文庫を創りました。その蔵書には、優れた書物の多いことで知られる金沢文庫（鎌倉幕府の執権北条氏の一族が創設した文庫。）の旧蔵書、朝鮮の優れた金属活字印刷による書物など、当時、収集できる最高のものが集められました。

駿河文庫の蔵書は、約1万点といわれます。家康の没後、将軍家に贈られた一部をのぞいて、およそ5対5対3の割合で、尾張、紀州、水戸の三家に分譲されました。現在、紀州・水戸両家分については、ほとんど「駿河御譲本」の実体を確認することができません。これに対し、約三分の一を流出したものの、蓬左文庫に残る尾張家分は、「駿河御譲本」の原型を最もよく伝えています。

<https://youtu.be/9kBFxh3c1aw>



蓬左文庫と駿河御譲本-[Network2010]  
2010Network  
2010/04/13 に公開

#### ◇彰考館文庫（現在は公益財団法人徳川ミュージアム）

<http://www.tokugawa.gr.jp/>

徳川ミュージアムは、水戸藩2代藩主徳川光圀公によって設けられた大日本史編さんの史局「彰考館」の事業を水戸徳川家から受け継いだ博物館です。この史局「彰考館」の由来は「彰往考来」「歴史を明らかにして未来を開く」という論語の言葉で、この精神は水戸徳川家が受け継いだ水戸学の精神といえます。

明暦3年（1657）2月、まだ世子であった光圀公によって江戸駒込邸内で大日本史編さん事業は始められました。寛文10年（1672）に史局は小石川に移り、彰考館と名付けられました。以来250年、江戸から水戸へ移りましたが、彰考館では修史編さんの大事業が続けられ、明治39年（1906）に完成した『大日本史』402巻が水戸徳川家より明治天皇に献上されました。

その後、昭和42年（1967）徳川圀順公爵によって、水戸徳川家伝来の什宝や光圀公が隠居された西山御殿（茨城県指定史跡）とともに、彰考館の史料を寄贈して、公益財団法人徳川ミュージアム（旧・財団法人水府明徳会）が設立されました。

その所蔵品は、水戸徳川家初代藩主頼房公に譲られた将軍徳川家康公の遺品（駿府御分物）を含む徳川家ゆかりの品約3万点と『大日本史』編さんのため諸国より集められた貴重な文書類約3万点を数えます。



<https://www.tokugawa.gr.jp/study/research/kaiko/>

平成25年度「開校・彰考館」プロジェクト水戸徳川家関連史料調査・活用事業  
2016/01/21  
公益財団法人徳川ミュージアム

◇南葵文庫（現在は東京大学附属図書館所蔵）

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai95/bnk/nanki.html>

震災の翌月18日、いち早く侯爵徳川頼倫から古在総長に寄贈の申出がなされた南葵文庫蔵書 25330部、96101冊。質量ともに本館蔵書の根幹をなすもの。

南葵文庫は麻布区飯倉の邸内で、明治後期から大正13年まで一般に公開されていた私立図書館であった。

紀州徳川家伝来の2万冊を始め、漢学者島田重礼の雙桂楼遺書（この中にはその師海保漁村の自筆本や書入本も含まれる）、依田学海遺書、山井重章旧蔵の漢籍、更には故実家、坂田諸遠、国学者小中村清矩の旧蔵書など、すぐれた収書群からなる。「紀州國徳川氏圖書記」「舊和歌山徳川氏藏」をはじめとする多くの旧蔵者の蔵書印は、旧南葵文庫職員である平野喜久代氏によって模刻・押捺され『蔵書印集成 全3巻』（1974）（総合図書館書庫A15:562）に収められている。また、総合図書館1階洋雑誌閲覧室には、徳川慶喜の揮毫になる「南葵文庫」の扁額がある。



<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai95/p/nk-sho.gif>

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai95/p/nanki-a.gif>

◇尊経閣文庫（現在は公益財団法人前田育徳会）

<http://ikutokukai.or.jp/information.html>

沿革

本会は、1926年（大正15）2月26日、加賀前田家16代当主前田利為（としなり）が設立しました。

その3年前に発生した関東大震災の惨状をみて、前田家伝来の文化財を保存し後世に伝えていくため、財団の設立が計画されました。

当初は、前田家が所蔵する古典籍の複製刊行を主な目的にしていたのですが、その後前田家より所蔵品の寄贈を受け、収蔵品の保存と公開を目的とする公益法人となりました。

2012年（平成24）4月1日に、公益財団法人への移行認定を受け、現在に至っています。

尊経閣文庫について

尊経閣文庫（そんけいかくぶんこ）は、公益財団法人前田育徳会の通称です。

設立者前田利為が、前田家5代当主前田綱紀（つなのり）の「尊経閣蔵書」にちなんで命名したとされています。

◇冷泉家（現在は公益財団法人冷泉家時雨亭文庫）

<http://reizeike.jp/>

冷泉家とは

冷泉家住宅は、完全な姿で現存する唯一の公家屋敷です。京都御所周辺の旧公家町に近世初頭以来の土地を守り、寛政2年に再建された建物と、その配置構成は旧制を忠実に伝えた貴重な遺構として知られています。

冷泉家伝来の典籍及び古文書類は、長家、俊成、定家以来の家学である和歌に関するものを中心に、数万点にのぼります。中世から近世にかけて、その時代の公家や武家の手で書き写されて流布したものも多く、伝統文化の継承と新しい文化の形成に重要な役割を果たしてきました。

冷泉流歌道と関連諸行事は、宮廷生活の伝統文化を今に伝えるもので、この継承保存は有形、無形の高い価値をもっています。

財団法人「冷泉家時雨亭文庫」は、以上の貴重な文化遺産を、将来にわたり総合的かつ恒久的に継承保存していくことを目的に、昭和56年4月に設立されました。

◇書籍館（現在は史跡湯島聖堂）

<http://www.seido.or.jp/yushima.html>

徳川五代将軍綱吉は儒学の振興を図るため、元禄3年（1690）湯島の地に聖堂を創建して上野忍岡の林家私邸にあった廟殿と林家の家塾をここに移しました。これが現在の湯島聖堂の始まりです。その後、およそ100年を経た寛政9年（1797）幕府直轄学校として、世に名高い「昌平坂学問所（通称『昌平校』）」を開設しました。

明治維新を迎えると聖堂・学問所は新政府の所管するところとなり、当初、学問所は大学校・大学と改称されながら存置されましたが、明治4年（1871）これを廃して文部省が置かれることとなり、林羅山以来240年、学問所となつてからは75年の儒学の講筵は、ここにその歴史を閉じた次第です。ついでこの年わが国最初の博物館（現在の東京国立博物館）が置かれ、翌5年（1872）には東京師範学校、わが国初の図書館である書籍館が置かれ、7年（1874）には東京女子師範学校が設置され、両校はそれぞれ明治19年（1886）、23年（1890）高等師範学校に昇格したのち、現在の筑波大学、お茶の水女子大学へと発展してまいりました。このように、湯島聖堂は維新の一大変革に当たっても学問所としての伝統を受け継ぎ、近代教育発祥の地としての榮譽を担いました。

大正11年（1922）湯島聖堂は国の史跡に指定されましたが、翌12年（1923）関東大震災が起これ、わずかに入徳門と水屋を残し、すべてを焼失いたしました。この復興は斯文会が中心となり、昭和10年（1935）工学博士東京帝国大学伊東忠太教授の設計と榊大林組の施工により、寛政時代の旧制を模し、鉄筋コンクリート造りで再建を果たしました。この建物が現在の湯島聖堂で、昭和61年度（1986）から文化庁による保存修理工事が、奇しくも再び(株)大林組の施工で行われ、平成5年（1993）三月竣工いたしました。

